

月の花挽歌 ～14. 二つの月～

14-5

「そんなにあるのですか……。勉強不足ですみません」と真紀は肩を少しすぼめながら溜息まじりに呟いてから、相談事の一端に関する無知さを恥じ入るように視線を落とした。

「その長野の造り酒屋がどうかしたのかね」

初耳とはいえ、同業者の名前に辰巳は興味を示した。

「……一年程前に亡くなられた『W酒蔵』のオーナーが、とても良くして頂いたお客様でしたので、お線香の一本でもと信州にお訪ねしたところ、女杜氏をしていらっしゃる妹さんにお会いして、ご自宅に一晚お世話になるほどお互いシンパシーを感じたのです」と真紀は遠回しに言ってから、コーヒーカップに手を伸ばした。

「翌日、彼女の車で新幹線の駅まで送ってもらったのですが、車中で唐突に酒造会社の厳しい経営状態を打ち明けられまして、早い話が、安請け合いをしてしまったという次第です」と真紀は大まかに言ってから、カップ&ソーサーをテーブルに戻して辰巳の反応を読みとろうとした。

「おおよその見当はつくが、私にどうしろと言いたいのかね？有り体に話すと言ったが、それにしても歯切れが悪いなあ～」と辰巳はもどかしそうに言った。

辰巳は言葉に詰まっている真紀の憂いを帯びた目を正面から見つめていた。

「一年前の話だと言うが、その長野の酒造会社は、今も持ちこたえているのかね」と辰巳は尋ねた。

「私もリーマンショックの余波に必死でしたので、杜氏の彼女とは電話でのやりとりしかできませんでしたが、何とか頑張っているようです。数日前にも、『H酒蔵』の社長さんと会うことを伝えたところです。御社のことは知っていました」

「当社を知らなかったら噴飯ものだがね」と辰巳はどちらかというも当然のこのように言って苦笑いを見せた。

バッグを膝元に置いた真紀は、意を決して書類を取り出すと、「ひと月前に帝国データバンクで調べてもらいました」とおもむろに言って、大事なものを扱うようにして辰巳に手渡した。

驚いた態度も見せずに、書類を受け取った辰巳は、慣れたしぐさで調査レポートと分析データに目を通すと、がっしりした顎に手をやりながら困り顔で言った。

「徳俵に足がかかっているね」

「俵に足がかかっていますか」と真紀は相手の言葉を反復した。

「チェックメイト寸前だね」

「リザイン寸前ですか」

辰巳は短く肯いた。

真紀は眉間を寄せた。